

## 2026\_0430「最後の最後のオーロラ」日々の理科 4281号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

スウェーデン北部のこの地では、例年、オーロラのシーズンは8月下旬から始まり、春の光が強まる4月中旬ごろに静かに幕を閉じます。長い極夜と白銀の季節を彩ってきた光のカーテンも、太陽の高度が上がるにつれ、夜空そのものが次第にその姿を受け止められなくなるからです。ところが今年は、活発な太陽活動の影響もあってか、4月下旬になってもなお、淡いながらオーロラの出現が続きました。湖の氷も融け初めているこの季節に、なお光が空に現れるのは、まるで名残を惜しむかのような異例の延長戦でした。

そして4月27日。ついに「最後の最後」と呼ぶにふさわしい光景が現れました。すでに北東の空は黎明に深く染まり、恒星たちはほとんど姿を消しています。夜と朝の境界が溶け合うコバルト色の空に、一本、孤立するように淡い緑のオーロラが浮かび上がっていました。全天を舞う壮大な爆発でもなく、空を埋め尽くす大出現でもありません。ただ、春明けの空に、自らの存在を静かに、しかし確かに刻みつけるような姿でした。

その光は、半年以上にわたる今シーズンの終幕を、自ら告げているようにも見えました。星の消えた明るい空になお現れるその姿は、闇の中で輝く冬のオーロラ以上に、むしろ切なく、そして美しい。去りゆく季節の最後にだけ許される、儂さそのものの光景です。これは単なる「最後のオーロラ」ではなく、光の季節が残した、最後の最後の署名だったのかもしれない。

(2026年4月下旬／スウェーデン・ヨックモック郡・ポルユス駅／東京から遠隔観測)

